

今回は概要を追うことはやめる。そのかわり、一つの観点を提示して、ゼミの該当章の肝要部分を照らすことにする。

文学の問題というのは実は思っている以上に、我々にとって根の深い問題なのではないか。そもそも、現在の僕たちが話したり書いたり読んだりしているこの日本語は、明治期に外国の小説を翻訳するために、あるいは、外国の小説のような小説を自分たちの言葉でやるために、編み出された新しい言語であって、その言語で日常的に生きている現代の僕たちは、自然と明治期の小説家たちの思惑の上に生きていることになる。

根が深いという意味は要するに、文学について興味がなかったり、小説を読まなかったりする人が、文学や小説とは無関係でいられるわけではないということだ。また、日本の文学という小さなジャンルの中のそのまた小さな「私小説」という分類についての話題が、私小説はおろか小説すら読まない人にとってさえ、大きな影響を与えうる。

日本語で書かれた文章が、どうしてもヨーロッパの言語のような絶対的客観性を持ちえないのは、近代日本の文学が「私小説」という形をいびつに発展させてしまったからなのではないか。これは逆ではなく、つまり、日本語がもともと絶対的客観性を持ちえない言語だから、その言語で書かれた小説がことさら私小説の発展を促した、のではなく。と疑ってみても良いのではないか。

もしそうだとしたら、これは驚くべきことであるし、また当然のことものようにも思えてくる。

ある言語(たとえば日本語)の言語的特徴やその特徴の時代的な発展の方向は、その言語によって書かれた文学作品によって決定される。少なくとも、大きく進路変更を受ける。という可能性がある。言語は共同体的なものであるが同時に独自のなものでもある。なかでも、文学作品は特定の作者を持った個人的なものであり、文学とはその集積である。ある個人が存在しなければ、その個人が作者となった作品は存在しない。特定個人の表現によって一つの言語の発展の方向が大きく変更された可能性があるということだ。「一人の人間になにができるか?」[265]というヴァレリーの問いへの一つの回答になりえる。

文学が、言語を素材として作られた成果なのではなく、むしろ、言語が、文学を素材として作られた成果なのだ。もちろん、これは言い過ぎている。還流させることで、より穏当な表現にすると「文学は言語を素材として作られた成果であり、その成果は言語を変質させる」となるのだが、これでは穏当すぎてつまらない。やはり、ある特定の作品たちでしかない文学が、共同体に充満している言語を作り出しているとしたほうがスリリングである。

この観点で、文学が現実とどのように交差するのか。「新・私小説論」から重要と思われる部分を引用する。肝要なのは、とりわけ「私」の問題である。小説に「私」と書いてある場合の「私」はどのようなものなのか。

重要なことは、ここで起こっていることが、堀江が書いていた「『複数の他者』は、その代表としての『私』をすり抜けて、あたりまえの複数がうごめく『私』になる」という特異な状態の、紛れもない実践であるということである。小島信夫は堀江敏幸と保坂和志にかんして「この『私』は『私』を含んでいるけれども、『私』ではないものを書こうとして、『私』をとりあえず含ませて書いている」と述べていた。これらを踏まえつつ引っくり返すなら、複数の「私」ではないものを含ませて書くことによって、はじめて立ち上がる「私」というものがあるのである。

いや、それこそが、それだけが「私」なのだ。[357]

だが「私」は「他者」でもある。いや「私」が他者なのだ。「他者」としての「私」を発見すること、いや、これも違う。精確にはこうだ。「他者」としての「私」を発明しなくてはならない。そうすることに

よって、そうすることによってのみ、ようやく私は「私」の名のもとに小説を書き出すことを許される。[361]

このいかにも文学的な言い回しである「「他者」としての「私」を発明しなくてはならない」ような現実の私が、私の小説を書き出すことが、現実の私の「現実」を変化させてしまうはずである。

私小説の問題が「実話か否か」を掲出しつつ隠蔽することであるのであれば、私小説が書かれることは「現実か否か」が暗に問題になり、ひいては「現実」が変質するということところへ行き着くのだろう。

小説というもの、とりわけ「私の小説」というものが、「私」という演算子（保坂和志）を用いて、「私」以外のなにかを何ごとかするという関数だとイメージできる。このとき「私」という演算子は、単一の演算を行うのではなく、その状況（作品、作家）に応じてさまざまな演算処理を行う。その例が後半、書かれているだろう。